



Christmas Short short
story 2013



Luno Teo

「お帰りなさいませ、坊ちゃん」

「坊ちゃんはよせとっているだろう、アマンド」

深夜に帰宅したノクトはコートを脱ぎ執事のアマンドに渡す。

「申し訳ありません、ノクト様.....しかし、クリスマスも近いのに今日もこんなに遅くまで」

「どうせ僕にはクリスマスも何も関係ないからね」

「今年はきっとラビ坊ちゃんが帰ってきますよ」

「さあ.....それはどうかな.....」

ラビが星月学園での寮生活をはじめてから3年になるが、それまで一度もノクトの屋敷に帰ってきたことはない。

「まあ、会いたいならば自分で会いに行くしかないかな」

ノクトは胸元のうちポケットからチケットを2枚取り出した。

「碧月サーカス団は、いまや世界で人気のサーカス団だからね。クリスマスの特別公演チケットをとるのは関係者でも難しい.....」

「確かにそのチケット、ノクト様なら必ず手に入れる事ができる。しかし、モノでつるとは坊ちゃんも落ちましたな.....」

「まあ、そう言わないでくれよ。こうでもしないとあの子と会えないだろう.....」

碧月サーカス団のクリスマス公演は、イヴに行う野外公演だ。

ノクトは待ち合わせ場所に指定したカフェに30分も早くついた。

(.....これじゃまるで.....はじめてのデートで浮かれる少年だな)

ノクトはなれないカフェオレを頼む。この辺の店はカフェしかなく、紅茶を出す店は殆どなかった。

この世の中には見えないものを実体化させる不思議な力がある。そのひとつがジュリンの持っていた紅茶のレシピだ。

しかし、自分が望んでなくとも通常の人間に見えないものが見えてしまうこともある。

「おじさん.....死相が出ている.....」

知らぬ間にノクトの前の席には見知らぬ少年が座っていた。

「君は何か得体の知れないものの勧誘かなにかなのかな？ それに僕はおじさんといわれるほど歳じゃないよ」

「イヴなのに男がひとりこんなカフェでくら一い顔をしているなんて.....」

「人を持ってるいんだよ、愛しい人をね」

「可愛そうに振られたんだね」

「いや、振られてないよ。ただちょっと遅れているだけだ.....きっと」

「認めちゃいなよ。好かれてないって、そのほうが楽だよ。あなたはこの界限でもとても有名だよ……いや、世界中でああなたの子とは知らない人がいないくらい有名だ。何だって手に入る。なのになんであの子に固執しているの？」

「あの子は僕の養子だからね、手に入れたといえば手に入れたことになると思うけど」

「でも、心までは手に入れてない……」

「いいんだ、気長に待つよ」

「……これだから、紅茶派の人間は……」

「まったくだ」

ノクトはカフェオレのカップを見ながら言う。ふっと見上げると少年はいなかった。カフェオレはすっかり冷めている。

ノクトくらいの鋭い感覚の持ち主だと、紅茶以外の精霊の声もたまに聞いてしまうことがある。

「待たせたな」

懐かしい声がある。ラビだ。制服を着てベレー帽をかぶっている。身長は以前に会った時よりはるかに伸びていた。

「はあ、もうこないんじゃないかと思ったよ」

ノクトはホッと胸をなでおろす。

「ああ……いろいろ選んでいたら遅くなった」

「選ぶ……なにをだい？」

「それより早く行かないと遅れるぜ」

ラビははぐらかすように言った。

「しかし、ずいぶん背が高くなったね。もうすぐ追い抜かれそうだ」

「そしたら、アンタが俺のこと見上げなきゃならないようになるな」

「君らしくないことを言うね？」

「……ずっと見下げられているのは嫌だったんだ」

イルミネーションで飾られた町を歩くノクトとラビ、しばらくの間沈黙が続いた。

ふとラビの手をノクトが握った。いつもクールなラビもさすがにびっくりしてノクトを見る。

「……？」

「いやあ、こうしていた方が寒くないだろ？」

ノクトは言い訳がましく言う。

「……手袋があるけど……」

ラビは反対側に手にしていた手袋をノクトに見せる。

「ゴホンゴホン……あ、あれだ……はぐれないようにだよ」

「まあ、別に何でもいいけど」

二人は会場に入っても手をつないだままだった。

さすがにラビが手を離そうとすると、ノクトは握った手に力を込めた。するとラビは彼とつないだ手を離さずにいた。

演目が始まる碧月サーカス団も団員がかなり増えたようだ。以前見みに来た時より人数も演出も派手になっている。

レプスと青いウィッグと衣装を着て少女に扮したミハルは幕間ごとに登場した。ピエロ的な役割なのだろう。彼らが登場すると会場に笑いが耐えない。

ラビの瞳はレプスの姿を追っていた。それは、彼の瞳と表情を見ればノクトにもすぐわかる。レプスも大分背丈が伸びたようだった。調度いまのラビと同じくらい。しかし髪は相変わらず黒く染めているようだ。

演技中ラビは一度だけレプスと視線があった気がした。その時にバンドネオンの音をはずす。今こちらに気づいたのでは……ラビがそう思ったときノクトに握られていた手が強くなった気がした。

碧月サーカス団のクリスマスイブの特別公演は華やかに幕を閉じた。

「楽屋にはいかなくていいのかな？」

ノクトがラビに聞く。

「……別に……」

後ろから大きな声がする。聞きなれた……でも久しぶりに聞く声。

「おい、テメー一挨拶もなしに帰る気か!？」

ラビが振り返る。

「レプス……」

「おいなんだよそれ」

「なにって？」

「その手だよ、その手」

レプスは二人がいまだに繋いでいる二人の手を指さす。

「ああ、これは……はぐれないようにだ」

ラビが答えた。

「いい歳して、しかもそのでかい図体ではぐれるかよ！」

「確かに……」

ラビとノクトはやっと繋いでいた手を離した。ノクトは苦笑いをしている。

「くっ、くそう……」

レプスはいまも何故か顔を真っ赤にして怒っている。

「ちょっと、レプス!! 片づけサボろうとしているんじゃないわよ。それから反省会もね。あなた本番で音をはずしたでしょ!？」

「げ、ダリア……」

赤毛の16か17歳くらいの少女がレプスの後方にある楽屋からやってきた。

「まあ、いい男じゃない！」

ダリアはラビを見てそうつぶやく。先ほどレプスに怒りを向けていたのを忘れてしまったようだ。

「ああ、お前、目が悪いんじゃないのか？ コイツとオレは同じ顔だろうが」

レプスはダリアに言った。

「たたずまいが違うのよ。180度違うわ。彼の方が断然男前よ」

「チッ……」

「ラビ！」

少し遠くからラビを呼ぶ声がした。

「……ミハル……？」

ミハルも以前よりは成長していた。以前より少女らしくも見えたが、化粧と衣装のせいもあるだろう。ミハルはレプスのところまでやってくると、彼の後ろに隠れて、そっとラビの方を見る。

「ほら、ミハルが怖がってるだろ。さっさと帰れ」

「さっきは帰ろうとしたら怒っていなかったか？」

「あ～も～」

レプスは自分でもめちゃくちゃなことを言っているとわかって、更にどうしていいかわからなくなっているようだ。

ラビはミハルの目の高さに跪き、にこりと笑う。

「本当にラビなの？」

ミハルはラビにおそろおそろ聞いた。

「ああ、そうだよ」

ラビがそう言うとミハルは彼に抱きついた。

「わーい、ねえ、今晚一緒にここにいなよ。団長がね、クリスマスケーキ作ってくれたんだよ」

「あ、ああ、あの……さっきは悪かった……せっかく来たんだし、ミハルもこう言ってるしな。残ってパーティに参加してもいいんじゃないか」

レプスはしどろもどろな様子だ。

ラビはノクトの方を振り返り彼の言葉を待っているようだった。

ノクトはにこりとラビにほほ笑む。

「そうだよ、君は残っていったらいい。そのためにプレゼントだって用意したんだらう？」

あんなに時間をかけて……時間を必ず守る君が遅刻する位。

「僕がいたら無粋だらう。大丈夫、僕ならひとりには慣れているから」

ノクトはひとりホテルの部屋に到着する。

そこは豪華なスイートの部屋だ。ベッドはダブル。しかし一人で過ごすには広く豪華すぎた。

「はあ、結局今年もひとりか……」

「そうだよ、かわいそうだね」

ノクトしかいないはずの部屋の中に、何故かあのカフェで会った少年がいた。

「君はカフェの……まだカフェオレの匂いが残っていたかな……」

「あなたくらい敏感だと嫌でも見えてしまうの、つらいよね」

「つくづく僕に珈琲はあわないな」

「そう？ 本当のことを言っているだけだと思うけど」

「本当のこと？」

「あなたは何でも手に入って、誰もがあなたのことを知っている。もしかしたら世界で一番有名でお金持ちかもしれない。だけど……孤独だってこと」

「そうか……確かにそうかもな……」

「それどころか……あなた恨みをたくさん買ってるもんね。その地位だもの逆恨みする奴らだってたくさんいる。こころあたり、あるんだらう？ 無茶なことも沢山言ったりやったりしてきたしね？」

「なんの……ことかな？」

「僕の名前はノエルだよ、覚えておいてね」

ドスンッと大きな音がしてノクトは目が覚めた。いつの間にかソファーで眠ってしまったようだ。暖炉から物音がする。

「イテテテ……」

「君は……レプス君」

「レプス、大丈夫？」

ミハルはレプスの上に乗りながら心配していた。彼らは煙突からこの部屋に入ったのだらう。なんてことだ。

「そんなところから入るから、もうノクトが起きてしまったらうが」

涼しい顔のラビ……君は、いつここに……ノクトが聞く間もなく……。

「うるせー、そう言うお前は どうやってここに入ったんだ」

「俺は今日ここに泊まる予定だったから、ロビーで合鍵を受け取ったのサ」

「あの一君達……」

ノクトがやっと口を開いたが……。

「ここに泊まるって……おい、ここベッド一つしかないじゃねーか!？」

レプスはノクトの言葉を無視してラビに問いただした。

「ダブルベッドだな」

ラビが答えた。

「おい、どういうつもりだよ！」

「どういうつもりって見たままだろうな」

「な、テメーやっぱりラビに……」

レプスがラビではなくノクトに詰め寄る。

「いや……その……」

「おい、そんなことより手伝えよ」

ラビはレプスを小突く。

「わ、わかったよ」

「待った、その前にすすを拭け」

そう言ってラビはタオルをレプスとミハルに投げる。

テーブルにはクリスマス用の食事や菓子類が並んだ。

「まあ、仕込みに限界があったからこんなもんかな」

「すごいきれいー」

「おい、おっさんボーっとしちゃってるぜ」

「僕はおっさんではないよ……しかし、これはどういうことなのかな？」

「見りゃわかるだろ、ここでクリスマスパーティーをするのサ」

「いや、しかし、ラビ……君はサーカス団で今晚過ごすのでは？」

「流石にあなたがイヴにひとりなのはかわいそうかなと……」

「そ、そうか……」

しばらく沈黙が流れる。

ぐう〜と誰かの腹が鳴る音がした。

「う……うう……」

ミハルが恥ずかしそうに顔を真っ赤にしている。

「さ、早く食べようぜ。せっかく冷めないうちに持って来たんだからな」

レプスが言う。

ラビはパヴァーヌを丁寧に淹れていた。部屋は紅茶の香りでいっぱいになる。

「かわいいサンタたちとクリスマスを過ごせて僕は幸せだよ」

ノクトは小さな声で呟いた。

「そうだ、これを……」

ラビは小さな箱をノクトに渡す。中には流星を形どったネクタイピンが入っていた。

「これは……もしかしてこれを選ぶために遅刻したのかな？」

「ゴ、ゴホン……」

ラビは咳ばらいをし、視線を外す。

「ノクト！ ボクからもプレゼントあるんだ！」

「おお、嬉しいね。ミハル君からもあるんだ」

ノクトは駆け寄ってくるミハルの頭をなでる。

「はい」

ミハルがノクトに渡した箱の中にはスノードームが入っていた。

「これ本当はレプスが買ったの、ボクから渡してって」

「ば、馬鹿、ミハル！」

「今僕は、君も養子にしなかったことをひどく後悔しているよ」

部屋は紅茶の香りでいっぱいだった。

妖精たちのささやき声が聞こえるが、先ほどの少年の声はもう聞こえない。

聖夜、外には雪が降り始めていたが、部屋の中は笑顔と暖かさに満ち溢れていた。

おしまい

Christmas Short short story 2013

<http://p.booklog.jp/book/80603>

著者 : Luno Teo

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/macky1999/profile>

URL : <http://luno.noor.jp/index2.htm>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80603>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80603>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ